1.平成 22 年度法人の概要

設置する大学の組織（平成 22 年 5 月 1 日現在）
設置者　学校法人東北芸術工科大学
所在地　山形市上桜田 3 丁目 4 番 5 号
設置する大学　東北芸術工科大学

■設置する大学の概要　　人数

		入学定員	収容定員
芸術学部	美術史・文化財保存修復学科	20	80
	歴史遺産学科	24	96
	美術科	142	518
デザイン工学部	プロダクトデザイン学科	60	220
	建築・環境デザイン学科	55	210
	グラフィックデザイン学科	55	110
	映像学科	50	100
	企画構想学科	40	80
	情報デザイン学科	－	110
	メディア・コンテンツデザイン学科	－	150
学部合計		446	1,674
大学院	芸術工学研究科（博士課程）	5	15
	芸術工学研究科（修士課程）	25	50
大学院合計		30	65
総計		476	1,739

■教職員概要（平成 22 年 5 月 1 日現在）

教員	109 名
職員	99 名

■在学生数（平成 22 年 5 月 1 日現在）

芸術学部	836 名
デザイン工学部	1,231 名
芸術工学研究科	151 名
合計	2,218 名

■役員（平成 22 年 5 月 1 日） 理事 17 名／監事 3 名

理事長　 徳山詳直

副理事長　古澤茂堂

常務理事　坂元　徹

常務理事　高久正史

理事　松本哲男

理事　入間田宣夫

理事　山田修市

理事　片上義則

理事　赤坂憲雄

理事　五十嵐眞二

理事　北村誠

理事　熊谷眞一

理事　高山克英

理事　寺脇研

理事　徳山豊

理事　細谷伸夫

理事　本間利雄

常任監事　清宮久子

監事　遠藤栄次郎

監事　松尾正城

2.平成 22 年度事業実績

1） 東日本大震災に伴う安否確認、支援状況について

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災においては、幸いにも在学生 2,153 名、入学予定者 580 名全員が無事であることを確認しました。入学予定者、在学生のうち被災地を実家とする学生が 717 名いたため、早急に理事会を開催し、授業料等の減免策を決定しました。具体的には、人的、物的被害状況に応じて、①入学金の返還、②授業料の全額免除、③授業料の半額免除、④休学者の授業料免除の4つの措置をとりました。時間が経つにつれ、事態は深刻さを増していきますが、被災した学生が勉学をあきらめることがないよう、今後もできる限りの支援を継続していく方針です。

また、平成 22 年度の卒業式はやむを得ず延期としましたが、改めて式を開催することを約束し、学生はそれぞれの社会人生活に入りました。

2） 学生募集状況について

昨年度と比較し、志願者は 307 名（昨年比 16%）の増加となりました。要因の一つには、平成 23 年 4 月から開設する文芸学科の存在がありますが、それを除いても 120 名の増加となりました。 文芸学科は、35 名の定員に対して、187 名の志願者があり、競争倍率は 3.1 倍と好調なスタートをきることができました。

3）就職状況について

平成 22 年度の学部卒業生 475 名の進路は、就職希望者 317 名中、就職者が 222 名（内定率 70%）、進学者は 70 名でした。進路先は多岐に及んでおりますが、中には教員採用試験に合格し、教職に就いた学生もいます。

震災の影響もあり、厳しい状況はしばらく続くと思われますが、未内定者については、継続して就職活動を支援していきます。

4）その他 「旧県知事公舎・公館の取得」について

平成 22 年 6 月、旧県知事公舎・公館を取得しました。名称を「やまがた藝術学舎」とし、県民市民のための施設として活用していくという方針のもと、運営委員会を設置、活用検討をしてきました。改修前には一般公開を行い、述べ 3,269 名の方が来場し、活用方法について様々な提案をいただきました。

震災後は、「東北震災復興支援機構」を掲げ、学生・市民によるボランティア活動の拠点となっています。特に東北の復興を担うこども達への支援を重点的に行っていく方針です。

【教育】

1）学部

平成 22 年度は、平成 21 年度に開設した新学科、新カリキュラムの 2 年目として更なる教育内容の充実に向けて全学的に取り組んできました。

デザイン工学部はグラフィックデザイン学科、映像学科、企画構想学科の学科が2期目となり、学部全体で 316 名が入学しました。

芸術学部では美術科の「テキスタイル」、「版画」がコースとして独立し、芸術活動を通して人々の生活を豊かなものとしていくことを目指す「総合美術」コースがそれぞれ 2 年目となり、226 名が入学しました。

また、カリキュラムの改革を主導する教養教育センターが発足 2 年目となり、初年次少人数ゼミ科目である「教養ゼミナール」の更なる改革のため「農芸体験」を取り入れたクラスを導入し、新入生の学びに主体性を持たせること、身体知を取り戻すことを柱とした改革を試行し、平成 23 年度の「教養ゼミナール」改革の基礎となりました。

これまで独立していた学生支援、教務、就職支援の3部門を「教学事務室」という 1 つの部門に統合も2年目をむかえ、各学科に専任の事務局職員を配置する体制により、教職員の連携は円滑になり、進路・就職支援では有効に機能しました。

平成 23年度の就職をとりまく状況は、より一層厳しくなるものと予測されています。全学でのキャリア支援の強化を図るべく、教学執行部を中心とした教員主導の就職指導に力を入れていきます。

2）大学院

平成 22 年度は大学院全体で 151 名が在籍し、1 名が博士号を、54 名が修士号を得ました。

大学院の学生募集は、芸術文化専攻 45 名、デザイン工学専攻 24 名（仙台スクール 5 名を含む）と、年度により増減はあるものの安定した志願者を集めております。

デザイン工学専攻は、学部の学科再編にともなう領域再編と、研究指導体制の見直しを継続して推進していきます。

【研究機関】
■東北文化研究センター
平成23年1月、新たに入間田宣夫大学院長が新所長に、また、田口洋美教授が新副所長に就任いたしました。東北文化研究センターの活動方針については以下のとおりです。

東北文化研究センターは、北の大地から平和を希求する大学づくりに寄与するために、あわせて、地域の期待にこたえ、地域にたいする責務をはたすために、微力を尽くしてまいりました。このたびの大地震・大津波による大災害から東北が立ち上がり、新しい日本のかたちを創出してゆくリーダーシップを発揮するには、縄文以来の弛むことなく積み重ねられてきた人間活動の歴史をこれまで以上に、より一層探求することが求められます。
すなわち、東北一万年の歴史と文化の蓄積に学ぶなかで、東北を新たな文明の出発点としてとらえ、未来への指針を探求しようとする姿勢がまずもって確立されなければならないと考えます。
そのことをふまえ、以下の4点を基盤に研究を進めることを確認しました。
□研究方針について
1）東北文化研究センターは今後とも東北全体を俯瞰し、東北とは何か、東北がこれからの日本あるいはアジアにどのような意味を持ち、また、貢献できるのかというテーマに基づき、これまでどおり「東北学」をもって具現化していく。ただし、従来の「東北学」にこだわらず、新たな方策を試み、歴史、民俗、考古以外の分野を取り込むことも視野に入れる。

2）現在取り組んでいる文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業は23年度で終了することから、新規テーマによる申請準備を行い、24年度の採択をめざす。新規テーマは、このたびの震災による東北の一日もはやい復興に少しでも寄与するために、「災害と人間」ほかをテーマに、歴史、民俗、考古の他にも関連する領域も巻き込みながら、新たな視野から論じていく。
このたびの地震を踏まえ、我々が訴えていきたいのは、東京の目線ではなく東北の目線による復旧と復興である。東北各地には営々と続く人々の歴史や暮らしがあり、それを無視した画一的なやり方、効率一辺倒のやり方は避けるべきであり、東北文化研究センターでは、『季刊東北学』を通してそのことを発信していく予定である。その前段として、今年8月発行の同季刊誌では「地震・津波・原発」を特集し、内外の研究者の論考を集約することによって、東北が、一万年もの暮らしのなかで、幾度となく経験した地震や津波、飢饉などの災害にどのように対処してきたのか、そのほかの問題について、解明する第一歩にしたい。

3）上記において、各研究員は歴史、民俗、考古の領域の他、関連する他領域の研究者との人脈づくりにも心がけ、全国的な広がりをもった東北文化研究の第一級の拠点形成をめざす。

4）東北を新たな文明の出発点とするための研究拠点を東文研とするならば、その東文研を支えるものが友の会と位置づけて、引き続き、会員拡大をめざす。

■こども芸術教育研究センターこども芸術大学

開学6 年目を迎え、こども芸術大学の理念「母なる大地の回復を願って」をより具体的に示すため、新たに教育目標『感じる心、感じあう心、つながりあう心を育てる』を定め、一つ一つの活動がその目標につながるように展開しました。

その中で特に、母親が子どもの創造性や純粋な感性を感じることができるように、母と子がともに過ごす時間を増やしました。集団の中でのわが子の様子を知ることや、わが子以外の多くの子どもたちの姿を知ることで、子どもに寄り添うことの大切さを感じ、愛情を抱くことにつながりました。

こども芸術大学の卒業を迎えた母からは「いろいろな人同士の係わり合いが難しいと感じることもあったが、相手のことを想像し行動することがとても大切だと思った」「自分の子どもだけはなく、多くの子どもをいとおしく感じられるようになった」といった意見が多く聞かれました。

また、こども芸術大学の在籍者以外の1 歳児の子どもと母を対象に子育て広場「だっこ」をあらたに開催しました。お母さんが子どもの成長や小さな変化に気が付き感じながら、子育てが楽しいと感じられるように、ゆっくりした時間と空間をともに過ごしました。
「日に日に成長していく姿に改めて感動しました。」「親が思っていた以上に楽しんでいた我が子の姿に驚きました。」という声が寄せられました。

■美術館大学センター

平成 22 年度は、2 名の学芸員にアシスタント機能（嘱託職員 1 名）が加わり、ここ数年における美術館大学構想事業の特色となっている、地域連携型のイベント展開にかかる推進体制がより強化されました。

山形美術館主催の展覧会「ロシアの夢 1917-1937」での関連企画（講演会、ワークショップ）や、「アフィニス夏の音楽祭 2010 山形」でのアートプロジェクト展開など、地域の美術館や交響楽団・自治体との連携事業に取り組み、多くの学生がワークショップや制作に関わりました。

4 年目となる「ひじおりの灯」では、これまで学生中心に制作していた灯籠絵に地元の子どもたちや青年団からも参加があり、卒業生が住み込みでウェブサイト「ひじおり旅の手帖」の取材・編集に取り組むなど、地域との連携がさらに強まってきました。

地域におけるアート活動の拠点形成と人材育成事業では、前年度から中心市街地で展開する「ミサワクラス」や「花小路トランク」などを中心とした諸活動を、卒業生や在学生が運営する「R コモンズ」として体系化。彼らの活動を情報発信するためのインフラとなるウェブ構築業務を、「R コモンズ」に委託しました。

京都造形大学との連携事業では、東京外苑キャンパスのオープニング展示企画の第一弾として「NIPPON ARTNEXT」の共同プロデュースを担当しました。両大学から選抜出品された展示の中でも、本学大学院生の作品や、当センターが手がけた「ひじおりの灯」や「Rコモンズ」の取り組みが高い評価を得て、東京のアートシーンにおける本学のポテンシャルを再確認することができました。

オープンしたばかりの「山形まなび館・MONOSCHOOL（旧第一小学校校舎）」との連携による

「荒井良二のやまがたじゃあにぃ 2010」では、市民も巻き込んだ運営ボランティア体制を構築するなど、中心市街地でのイベント展開に新しい可能性を得ることができました。

秋季のメイン展覧会では彫刻家・古郡弘氏を招聘し、彫刻コースの演習科目と連携した「古郡弘展ーからぎ、かりどの」を開催。学生と大学の裏山を散策しながら、この土地に根付く信仰や歴史的背景を感じ取りながら展示を設計するなど、地域の歴史や文化に密着した取り組みとして高い教育効果が得られました。

卒業／修了研究・制作展では、全体の運営業務を教学事務室に移管しましたが、学生を中心とした卒展運営委員会の活動をサポートし、学生参加型のトークイベント「ウッドデッキトーク」を会期中連日開催。学外ゲストや教員・OB を交えながら、卒業・修了生が自ら参加し運営することにより、改めて教育活動の締めくくりとしての「卒展」の方向性を示すことになりました。

■全国高等学校デザイン選手権大会

デザインは、ものの色や形を決めるだけの行為ではなく、社会の多くの人々と共有する問題を発見し、それを解決していくプロセスにこそ本質があります。本大会では、「デザイン」は決してデザイナーと呼ばれる人たちだけが持っている特別な能力ではなく、社会で生きていくなかであらゆる人にとって必要な力だと捉えており、そのことを一人でも多くの高校生に伝えたい、身に付けてもらいたいという思いから毎年開催しています。

平成 22 年度に開催した第 17 回大会では、大会審査員でもある中山ダイスケ教授のディレクションのもと、本学学生が新たなロゴマークを制作したほか、これまで以上に高校生に分かりやすい表現で大会を伝えることに努めました。その結果、過去最高となる 562 チームの応募登録を記録しました。

また、第三位に輝いた北海道札幌平岸高等学校チームの提案『ネガポ辞典』は、北海道内のゲーム開発会社の協力のもと、スマートフォン用のアプリケーションとして開発され、専用のサイトからダウンロードできるようになりました。多くのユーザーから高い評価を得ています。